彼女の一日の始まりは、小学校のどの子よりも早かった。

夜の闇を祓うように地平線から赤い光が姿を現し始める朝。彼女は窓によって四角く切り取られた世界を、その光景をじっと見ていた。徐々に青さを取り戻していく空はまるで海のようで、絵画のようでもあった。空に差した朱は夕焼けのようにも見え、綺麗だなぁ、なんておぼろげに思いながら、まだ二度ほどしか行ったことのない海を思い出している。

それは毎朝見ている光景だったが、飽きることはなかった。

毎日ちょっとずつ変化している姿に痛快さはないものの、緩やかに変化していく姿を見ることは自然と自分のことのように思われ、心を落ち着かせてくれた。彼女にとって、空とは自分であり、そして友達でもあった。

「……お掃除しなくちゃ」

そう呟いて、空から目を離す。掃除の再開。牛舎は綺麗でなくちゃならない。牛舎が汚いということは家族を汚いところに住ますようなものだと、父親から何度も聞かされている。死んじゃうことだってある。そう聞いてしまっては一生懸命やるほかない。無論、彼女は元々一生懸命やっていたが、依然にもましてその意思は強くなった。

牛を無意味に殺してしまうことは自分を殺すことだと、及川雫は知っていた。

小さな手でモップを持って、濡れた床をゴシゴシと擦る。汚れが浮き立ち、綺麗な水を茶色

にしていく。それを外へと追い出して水でまた床を濡らす。極めて単純な作業だ。
しかし、単純な作業ではあるために七歳の体にこの作業は荷が重かった。体重を上手く乗せられないと汚れは落ちないし、そもそも体力だって使う。朝早くに起きることも小学生になったばかりの彼女には荷が重い。それでも、彼女は休もうとは思わなかった。
汚れた軍手で額の汗を拭った。雫の汗が軍手に染みこむ。糸が綻んでいる部分もあり、それは労働の証だった。絶えず作業をしなければならない苦労は大人がよく知っているだろう。両親や祖父母は搾乳で忙しい。他に従業員はいるものの、朝から働かせていないため、喋る相手もいない。そのため、毎朝雫は黙々と掃除する以外にすることがなかった。最早染み付いてしまい、それが異様なことだとは思えない。
結局、一時間半ほどの時間をかけて雫は牛舎を綺麗にした。牛たちに怪我がないように、きちんと掃除に使った道具を戻して鍵をかける。ガチャンと誰もいない牛舎に音が響いたのと同時に、牛舎のドアがおもむろに開いた。
「雫ー」
「お母さん！」
「ちょうど終わったみたいねー。今日もよく頑張りました」
母親の体に雫は飛び込んだ。ぼすんと雫の顔が母親のお腹に埋まり、母は雫の頭を優しく撫でた。母親譲りのクセっ毛が母の手の動きに合わせて、揺れる。

「ご飯にしようね」
「うん」
　母親と手をつないで牛舎を出ると、外では青空が広がっていた。初夏らしく、もうすでに気温は高く、蝉たちがけたたましく鳴いていた。木が多いものだから、自然と蝉の数も多くなる。牛舎から家までの道は整備され、きちんと均(なら)してある。草の生えていない道を雫は母と手を握りながら歩く。
「牛さんたちの体調はどうだったの？」
「そうねぇ、特に悪い子はいないみたい。どうしても夏は急に体調変わっちゃうから……でも、雫が毎朝掃除してくれてるから、大丈夫かしらねー」
「えへへ」
「こーら。歩きにくいでしょう」
　手を離さずに母親にべったりとくっつく雫を、笑いながら余った手で頭を撫でてから母は引き離した。雫は嬉しそうに笑いながら母に取り残されないように足を動かしている。
「雫、学校はどう？　お勉強は楽しい？」
「うん。平仮名は全部書けるし、自分の名前なら漢字も書けるよ」
「すごいわねー。先生に教えてもらったの？」
「うん！」

「良い先生ね」
　他愛のない会話が続き、しかし、それが家族の証明のようなものだと雫は無意識ながらに気付いていた。雫は毎朝訪れる母との会話が楽しみでしょうがなかったし、雫の母とてそれは同じだった。
「もう夏ね。雫は小学生になってから、初めての夏だけど、楽しみ？」
「宿題がいっぱい出るから、あまり楽しみじゃないー」
「ふふ。お母さんも手伝ってあげるから頑張りなさい」
「はーい」
「じゃあ、そんな良い子の朝ごはんは何にしようかしら」
「パンケーキ！」
「それは今度作ってあげる」
　坂道を登り切ることで、ようやく家が見えてくる。雫は母の手を離すと、家に向かって走り出した。母もそれを追いかけ、一瞬のうちに駆けっこになる。
「捕まえた」
　きゃっきゃっと笑いながら雫たちは家へと入っていく。扉を開けると、仄かな味噌の香りが雫を迎えた。雫は笑いながら靴を揃えて玄関を上がり、母はそんな雫が脱ぎ散らかした靴を整理してから玄関を上がった。

「きちんと手を洗いなさいねー」
大きな声を洗面所に向けて放った。ややあってから洗面所から声が返ってくる。洗面所では背丈が足りないために、踏み台の上に乗って蛇口に手をやっている雫の姿がある。水で手を濡らして家で作った牛乳石鹸を泡立てると、歳相応ではないマメだらけの手が泡で満たされた。
泡を洗い流すと固くなった手のひらを水が転がるように落ちていく。それに対抗するかのように、雫は両手で柄杓を作って水をためて口に流し込み、吐き出した。
「ふぅ」
レバーを上に退けて水が流れなくなったことを確認すると、踏み台から足を降ろした。ついでに自分の二の腕辺りをくんくんと嗅ぎ、臭いが蔓延っているのかを確認する。草や土の匂いが僅かにしたが、別段問題がなさそうだと判断したのか、雫はそのまま洗面所を後にした。
階段を駆け上がり、自分の部屋へと戻る。プラスチックで出来たピンク色の棚から詰まっている洋服を引っ張り出した。牛が描かれたトップスにピンクのスカート。母が雫のために選んだ服は、雫から牧場の子供だということを見事に脱色させた。
昨日の内に片づけた宿題や筆箱を赤いランドセルに詰め込んで、片方の肩にかけて玄関へと戻る。ランドセルを床に置き、帽子掛けから帽子を取ってそのランドセルを上に載せた。玄関には先ほどの味噌の香に加えて、肉の焼ける香ばしい匂いが漂っていて、雫の鼻をひくひくと動かした。リビングに足を運んでみれば、肉の油で跳ねる音が台所から生まれている。

「今日は何ー？」
「ソーセージよ。ご近所さんに頂いたから」
　ご飯はすでに食卓に載っており、それに合わせて味噌汁も寄り添うように置かれていた。そのどちらの器も雫が生まれた時に両親が買った物だった。桜の花びらが白い陶器の中を泳ぎ、その合間を縫うようにして蝶がぽつりと飛んでいる。どちらもが丁寧に仕上げられた茶碗で、その意趣が雫には伝わるにはまだ少しかかるだろう。
「はい、どうぞ」
　母が台所から運んでくる皿の上に卵焼きとソーセージが鎮座していた。バジルが練りこまれたソーセージは油でてかてかと光り輝いていて、皮を破れば油と共に肉汁が溢れ出すことを予感させた。そのすぐ横では、何層にも折り畳まれた卵焼きがいる。層の中には白い半熟の部分があったし、また黄色だけで構成された層もあった。その表面には軽くついた焼き跡があり、優しいだけの色合いに少しだけ異議を唱えているようだった。
「味付けはしてあるからね」
　ことりと食卓に置かれた皿を前に、雫は目を輝かせた。掃除に行く前に食べることには食べるが、あまり取るわけではない。そこに仕事が加わるのだから、朝食の時間には腹ペコになるのも当然で。
「いただきます」